

## 第十章 沿っていくプロセス

沿っていくこととは、ボストンCPSSGが用いている言葉で、少なくとも調子を合わせながら治療面接を前に進めていく日々の対話のことを指している。それは、治療者と患者が共にすることである。沿っていくことを特別なものにしてるのは、私たちがその対話を見る際のスケールである。それは微小分析レンズを通して見た治療プロセスであり、その単位は数秒という短い持続時間から成っている。これまで私たちが見てきたように、人々の間に在る生活とは、比較的小さなスケールで、直接的に生きられているものである。すなわち、文、間、表情、振舞い、感情、思考である。もちろん、これらはひとつに束ねられ、すべてを支配する単位になるように集められる。この小さなスケールのことを、**局所的レベル**と呼ぶことにしよう。それこそが、現在の瞬間が出現する場所である。

治療セッション終了後、セッション全体をレビューする際、逐語録をおこし、その主なテーマを理解し、そのセッションが治療過程全体のどこに位置しているのかを評価するのは簡単なことである。ところが、セッションの最終に、そのセッションを内側から見ると、その道筋はより不明確で、単純でなく、指向性も曖昧であることに気づく。**沿っていくこと**とは、しばしば、ぶらぶらと歩きながら、行くべき道を探し、見つける——という、ゆるゆるとした方向性しか持たないプロセスである。——時には道に迷い、また正しい道に戻ったりして（あるいは新しい道を見つけた）りして、向かうべき目標を選びながら進んでいく。その目標は、進みゆく中でしか見つからないことも多い。——それが展開している局所的レベルでそのプロセスを見ると、案外そんなようなものである。

治療の内側から局所的レベルでプロセスを見る——という視点は、このアプローチ独自のものである。（ラドヴラ

の研究は、この方向性を有する先駆的な仕事である。(二)

ここで、幾つかの質問を挙げ、私がそれに答えるという形で、沿っていくことに関し、局所的レベルで探究してみよう。すなわち、①沿っていくことを構成している要素とは何か？ ②沿っていくことを前進させたり、その流れを調節したりしているものは何か？ ③沿っていくプロセスの持つ性質とは？ ④沿っていくプロセスは、どこへ向かうおうとしているのか？——の四点である。

### 沿っていくことを構成している要素とは何か？

二つの要素が、沿っていくプロセスを構成している。すなわち、①単に気づかれているだけの現在の瞬間と、②意識にまで入り込んでいる現在の瞬間である。後者の現在の瞬間は、言葉、身振り、沈黙などを、意味のあるグループになるようにチャンク化した単位である。それらは振舞いの流れをパッケージにする。さて、①の単に気づかれているだけの現在の瞬間を、**関係性の動き**と呼ぶことにしよう。人は、関係性の動きが生じている時、そのことに気づいてはいる。しかし、それが長期記憶に入り込むことはない。そのため、後で自叙伝的出来事として思い出され、語られることもない。しかしそれは、②の意識的な現在の瞬間と同じつかの間の構造と生の物語の構造を持つっていると仮定されている。

方法論的には、意識的な現在の瞬間は、内省および共同（再）構築へとつながる一人称の現象として描写されうる。一方、関係性の動きは意識に入り込んでいかないため、客観的にしか描写されえない。つまり、それが起きている間

(原注二) 本章と次の二つの章における中心的発想の多くは、ボストン変化プロセス研究グループ (Boston CHG) の研究より引用したものである。このグループの共同作業は、(一)(二)の継続刊行物に掲載されている。私は、私たちが共同で公式化したものに多くの変更を加えたことに一切の責任を負う。

は一人称の体験なのであるが、感覚としては三人称の体験としてしかとらえられない。したがって、関係性の動きの心的様相については、私たちは推論することしかできないのである。

意識的な現在の瞬間は、三つの異なるグループに分けることができる。第一のグループは、**通常の現在の瞬間**である。これについては、前章においてすでに詳述した。第二のグループは、**まさに今という瞬間**である。これは、突然持ち上がって来る現在の瞬間であり、切迫している重大な成り行きが、その場を圧倒的に満たす瞬間である。それは**カイロスの瞬間**であり、**現在性がずしりと押しかかり、行動を迫られる瞬間**である。第三は、**出会いの瞬間**である。これは、二人が間主観的な出会いを遂げる現在の瞬間である。この瞬間において、二人は相互に体験していることに気づくようになる。そうして彼らが十分に同じ心象風景を共有すると、「**特異的適合**」感覚（（六〇八））「そこにしかないぴったりの感覚」を得ることができ（サンダーによる）。**出会いの瞬間は、通常、まさに今という瞬間により引き起こされるため、そのすぐ後に生じる。出会いの瞬間は、そこで、まさに今という瞬間において生まれ出た、解決を迫られている要求を解決する。**

沿っていくことを前進させたり、その流れを調節したりしているものは何か？

沿っていくことの大部分は、間主観的接触を構築したいという要求により駆り立てられて前進する。私たちが、間主観的動機というごくありふれた動機を、特に臨床状況に関連のあるものとしてとらえているのは、まさにそのためである。臨床的プロセスを前進させる間主観的動機は、主に三つある。第一に、他者の考えをさぐり、その人が今、間主観的領域のどの位置にいるのかを把握したいという要求である。これは、**間主観的方向づけ**と私が呼んでいるものである。それは、一瞬また一瞬と小刻みに試すことを含め、そのほとんどは意識の外で起きている。患者—治療者関係が、今、どの位置にあり、どこへ向かおうとしているのか——の判断は、これに当たる。これは、共に作業する

前段階と言えよう。

第二の間主観的動機は、知り合うために体験を共有したいという要求である。これは、絶えず間主観的領域を拡げていきたいという欲求も含んでいる——言い換えれば、共通の心的繩張りを持ちたいという欲求である。間主観的領域が拡がりゆく時には、関係性も暗々裏に変化する。それは、患者が治療者と（願わくば他者とも）共に在る新しい方法を体験しているということの意味する。変化は暗々裏に生じる。言葉にして明白にする必要はない。それは、患者の関係性に関する暗黙の了解の一部となる。それともう一つ、重要な成り行きとして、間主観的領域が拡がる際には必ず明白な探究のための新しい道が開ける——ということがある。患者の世界のより多くの部分が意識されるようになり、言語的にも理解可能となる。

第三の間主観的動機は、他者の目から見た自己に関する照らし返しを用いて、自己の定義を繰り返し再定義したいという要求である。自己同一性は、このプロセスを通じて修正され、整理されていく。

これらの目標は、セッションにおいて構成される一連の関係性の動きと現在の瞬間により、局所的レベルにおいて認識されるものである。

これから示す事例は、間主観的領域に適合している関係性の動きと現在の瞬間との対話を描き出したものである。事例は、ボストンCPSSGのあるメンバーの臨床経験から引用した。多くの臨床的逸話と比べて、それは極めて平凡であり、劇的な出来事は全く含まれていない。これが私の用いるほとんどの臨床例の真実である。私たちは内容よりもプロセスを追っているということを思い出してほしい。理論的には、私たちはそのプロセスの幾つかの特徴をちらりと見るためならば、どこからでもセッションに飛び込むことができるであろう。

### 関係性の動きⅠ（セッションの始まり）

患者 今日、全然、ここに居る気がしないんです。（間主観的意図としては、関係性において彼女がとっている

ポジションの目下の状況をアナウンスしたいということである。それは、一定の距離をもたらし、少なくともその瞬間においては、多くの間主観的な作業をする気にはなれないということを示している。彼女は、そのような共同作業を求めているか、あるいは未だ準備ができていないと言っている。）

### 関係性の動き2

治療者 ほう。（語尾にアクセントを置いて、そう言った。これにより、患者の宣言を「ちゃんと受け取りましたよ」ということを示している。患者が持ち出した間主観的状况を丸ごと受け入れたのか、それともやりわりと疑問を示したのか、その両方なのかは不明である。いずれにしても、共に作業することへと向かう小さな一歩であることに変わりはない——小さな一歩ではあるが、ただ黙っていたり、「ふむ」と語尾を下げる言い方だったりすることに比べれば、重要な一歩である。「ほう」は、「ふむ」よりもオープンな上に、疑問符の意味合いを含んでいるからである。それは未来の出来事を暗示している。）

### 関係性の動き3

両者 「六秒間、沈黙に包まれる。」（患者は、目下の間主観的現状を変えようとして、気が急せいているということ、ためらいという合図で伝えている。沈黙が徐々に発展する中、治療者は、「この瞬間のために、何もしませんよ」という暗黙の意図を前面に押し出す。それはまた、暗黙の誘いでもあると同時に、患者が自分で沈黙を破るようになり、やりわりと圧力をかけているとも考えられる。あるいはその両方であろう。しかし同時に、彼らは目下の現状を、ある意味で相互に受容している——という状況を共同創造している。言い換えれば、何も言わないし、何も言わないということである。どちらかと言えば流動的、あるいは不安定な受容が続いているようだ。）